

テーマ 子どもの育ちにとってのよりよい保育環境を求めて

——「なかよし保育」を通して——

豊橋市明照保育園

主任保育士 中島美奈子

1. はじめに

環境を通しての保育を大切に、日々子どもの様子を見ながら計画を立て、子どもに見合った環境を設定しつつも、ともするとそれでも子どもを受け身的にしてしまう場合が見られ、反省することがあります。子どものうちに秘めた自発性が表出されるためには、時には思い切って保育の枠をとりはらうことも必要ではないでしょうか。その時に表れた子どもの一面を発見することは、保育者自身次への保育のヒントにつながると予想されます。同時に保育者だけでなく、保護者や地域一般の大人も関わることで、保育園だけでなく、開かれた中で子どもの育ちを考えていけたらと思えました。このような考えのもとで、「なかよし保育」という形態に取り組んでみました。

2. 実践内容

「なかよし保育」（月1回の土曜日）

- ・ねらい ①普段の保育形態の枠を広げることで、子どもの自発性を高める。
②保護者や地域の人が保育をする立場に立ってみることで、子どもへの理解を深め、子育ての楽しさ、大切さを感じる。
③保育者は普段と違う環境での子どもの様子から、子どものさまざまな側面を敏感に感じとり、子どもへの理解をさらに深め、援助のあり方を探り、保育全体に生かす。
- ・形態 園内のあちこちに遊びのコーナーを設定し、学年の枠をこえ、好きな場所で好きな遊びをしながら、同年齢・異年齢の子や保育士以外の大人と関わる。時期に応じて食事いつもと違う雰囲気食べる。遊びのコーナーには、普段の園での遊びに加え、保護者や地域の人による遊び（絵本読み聞かせ、うたごえ広場、運動遊び、サッカーごっこ、あやとりやけん玉など）も募集する。

○12年度の実践より

- ・保護者の参加が多く一緒に遊ぶようにしたが、不参加の家庭の園児は寂しがり、参加した家庭の園児は自分以外の子と関わる親の姿に情緒不安となる場合があった。

○13年度の実践より

- ・保護者の参加方法の見直しをし、遊びのコーナーを持ってもらうことで、園児の戸惑いは少なくなったが、参加者は一部の人に限られてしまう。
- ・回を追うごとになかよし保育を楽しみにし、自ら遊びを考え出したりする姿が見られたり、乳児の部屋でやさしく関わる姿が見られた。

- ・どこで遊ぼうか迷ったり、友だちを探して時間が過ぎたりして、じっくり遊びきれない子もいた。
- ・アンケートにより、参加者は子どもの元気さ、共に楽しむことの大切さを強く感じていた。

○14年度の実践

- ・学校5日制により、児童にも開放。なかよし保育を経験した卒園児を中心に4月は43名が園児と関わって遊ぶ。

3. まとめ

子どもの育ちにとってのよりよい環境を求め模索的に行ったなかよし保育は、試行錯誤を繰り返しつつも、園児の中にも徐々に定着してきています。この形態を導入し、いつもと違う環境のなか情緒不安になる子どもたちもいるのを見て、一番に戸惑ったのは私たち保育者でした。しかし、子どもたちが次第に保育の枠から広がった世界に目を輝かせ、自主的に遊びやかかわりを求めていく姿に、保育者自身学ぶところが多く、それは普段の保育の環境の在り方や援助の仕方に反映されつつあります。

指針に示されるように、地域における最も身近な児童福祉施設として、園を保護者や地域に開放し、園児にとっても地域にとってもよりよいものとなる保育のあり方を、今後さらに探っていきたいと思います。